

2024年11月10日 青戸教会 「神は石ころからでも」

高橋克樹牧師

聖書 創世記13章1〜18節、マタイ福音書3章7〜12節

マタイ福音書3章は洗礼者ヨハネが荒れ野に登場してきて、イザヤ書40章の言葉を引用して『荒れ野で叫ぶ者の声がする。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ』』と言ったのでした。メシアがこの世に来られるので、その道を整えなさいということを宣言したわけです。メシアが到来する前に、でこぼこになっている道を平らにして出迎える準備をなさい、という意味です。でこぼこの道を平らにすることの意味は、洗礼者ヨハネが2節で言っているように、「悔い改めなさい」という意味です。

さらに、洗礼者ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人たちが大勢、彼から洗礼を受けるために来たのを見て、7節にあるように『蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。「我々の父はアブラハムだ」などと思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる』と警告の言葉を浴びせかけたのです。「我々の父はアブラハムだ」という言葉には、アブラハムの契約が念頭にあります。アブラハムの子孫には割礼が命じられています。それによって。男性は、契約の民になったことが確約されたと考えられていたのです。契約の民に自動的に組み入れられているということは、神の恵みに自動的に組み入れられたことが保証されていると考えられていたので、自分たちは救われる摂理の中にいるのだという安心感をファリサイ派やサドカイ派の人たちは抱いていたのです。

1

ところが、洗礼者ヨハネが罪を告白して悔い改めてバプテスマを受けなさいという活動をしているのに接して、自分たちはアブラハムの子孫であることに安住してきたかもしれない。もしかしたら、悔い改めなければ救われなかもしれないと不安感を抱いたのでした。自分たちは割礼を受けて、しかも律法を守って生きている。神の救いの約束を確実にしたアブラハムの契約の中に招き入れられているはずだ。けれども、もしも洗礼者ヨハネが言うように、悔い改めなければ、救いにあずかることができないかもしれない。万が一にもそのようなことはないだろうが、なんだか心配になって来た。そのような心情を抱いてファリサイ派やサドカイ派の人たちが洗礼者ヨハネのところに来て、万一のために、用心のために、洗礼者ヨハネからバプテスマを受けてみようと考えてやってきたのです。

けれども、彼らの心の中には、自分たちは割礼を受けて、アブラハムの子孫となっている契約の民である、という自意識があったので、決して、救いから漏れるようなことはないだろうけれども、安全のために、念には念を入れて、洗礼者ヨハネからバプテスマを受けておこうとしたんです。ですから、ヨハネは、彼らの傲慢な思いを見破っていたので、『蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。「我々の父はアブラハムだ」などと思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる』と言ったのです。石からでもアブラハムの子孫を造り出すことができると言ったのです。契約の民であるという自尊心を路傍の石にたとえて、粉碎したのでした。

そしてヨハネは、『わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる』（11節）
と言つて、自分の後から来られるメシアたるイエス・キリストによってユダヤ人以外の
異邦人にも神の救いが及ぶようにしてくださいとさるということです。つまり、イエス・キ
リストに対する信仰によって異邦人にも神の救いが及ぶようにしてくださいとさるというこ
とを予言されているのです。つまりは、イエス・キリストへの信仰によって、ユダヤ
人以外のすべての民がアブラハムの子孫になる道を切り拓いてくれたのです。

そして、10節では、『斧は既に木の根元に置かれていた。良い実を結ばない木は
みな、切り倒されて火に投げ込まれる』と言うことで、悔い改めることによって、良
い実を結ぶ木になるけれども、斧が既に木の根元に置かれているように、悔い改めな
ければ、すぐにでも斧によって切り倒されて火にくべられて存在自体が消滅してしま
うと強い調子で警告しているのです。

山本有三の「路傍の石」は、極貧の家に生まれた愛川吾一は尋常小学校で総代とし
て卒業して将来への夢を抱いていたのですが、飲んだくれの父親のために進学できず、
呉服屋に奉公に出されるのですが、純粋な心と向上心を失わずに、生きていくのです
が、戦中で未完に終わる小説です。明治の終わりから大正時代の日本の時代背景が描
かれているのですが、この時代背景を現代の視点で吟味することは難しい側面がある
と思われます。ただ、現代日本の状況を顧みる時、経済的に困難な状況が出現してい
ることを重ね合わせてみると、意外と読んでみる価値があるようにも思われます。

現代は以前と比べると圧倒的に小説を読むことが少なくなつたように思います。S
NSを閲覧する機会が多いのに、小説は読まない。それは言うなれば、自分の人生
しか見ていないのと同じです。小説を読むことによつて、自分の人生では味わえない
人間の苦悩や悲しみ、様々な心のありようがあつて、そのどん底から這い上がつてい
く人間の精神的な成長が描かれていくのですが、それによつて、小説を読むことを通
して、自分とは違う人間のありようが見えてくるのです。いわば、小説によつて自分
の人生では体験できない、もう一つの人生をたどることができるのです。路傍の石と
してしか生きられない状況は、客観的には辛いものですが、大なり小なり、私たちは
自分の人生を思い通りには生きられません。けれども、小説を通して、たとえ、その
主人公が精神的な成長を遂げることがなくて、路傍に打ち捨てられるような状況にな
つても、それはそれで、自分の人生を顧みる機会を与えるものとなるでしょう。卑近
な例を挙げると、メジャーで活躍している大谷翔平選手の自宅を明かしたフジテレビ
が彼から取材拒否をされるのは当たり前です。ちよつと考えれば、悪い人たちに大谷
選手や家族が襲われる可能性が高まるのですから、そういう想像力が働かないのはま
ずいわけです。確かに他人の生活をのぞき見したい欲求をテレビ局がやってみたかつ
たと思うのですが、この欲求を小説の主人公の人生をのぞき見するような気軽さで小
説を読んで満たすのも悪くはないと思うのです。

神は石ころからでもアブラハムの子を造り出すことができる。ヨハネは言ったので
すが、それは、石ころのような路傍の石である者をも救いに招く神の愛があることを
私たちに告げています。私たちの人生を導く神の御手がどのように自分の人生を導い
ているかを、小説の主人公の人生と見比べてみることで鮮明にされるのです。